

# グリーフケアから見た葬儀・法事

平 めぐみ・長野 恵子

(西九州大学大学院生活支援科学研究科)

(平成26年12月10日受理)

## Funeral Services and Buddhist Memorials from Grief Care Perspective

Megumi TAIRA and Keiko NAGANO

*Graduate School of Human Care Sciences, Nishikyushu University*

(Accepted: December 10, 2014)

### Abstract

This study considers the influence of funeral services and Buddhist memorials on grief care for bereaved families. We conducted a semi-structured interview comprising seven questions with bereaved families. The respondents were ten individuals (three men and seven women, age range: 57-95 years) who had lost close family members, such as parents or spouses, within the previous ten years and who had held funeral services or Buddhist memorials. Statements closely related to question items were extracted from a verbatim created from the interview content, grouped into topical categories and analysed using qualitative and descriptive methods. As a result, three large categories such as 'funeral services', 'Buddhist memorials' and 'reflections on funeral services and Buddhist memorials' as well as seventeen small categories including 'interaction with relatives', 'interaction with the deceased', 'reaffirmation of bereavement' and 'gratitude to the deceased and surrounding individuals' were extracted. The results suggest that interaction with guests and relatives through funeral services and memorials could provide social support. They also suggest that experiencing a funeral service or Buddhist memorial deepens the bereaved person's ability to realistically approach the loss, helps the person to face death and offers an effective way to promote grief care.

キーワード：グリーフケア、葬儀、法事

Keywords : grief care, funeral services, Buddhist memorials

## 1. 問題と目的

平成26(2014)年9月に発表された厚生労働省の人口動態統計によれば、平成15(2003)年より平成25(2013)年まで日本人の年間死亡数は100万人以上を推移している。大切な人との死別を体験する人の数はこれ以上であると予想できる。

Freud(1917:138-139)によれば愛する対象を失った悲しみは、対象の喪失を受け入れることで故人へ向かっていったエネルギーが回収され、徐々に解消されるとしている。また、愛する対象の喪失によって引き起こされる情緒的反応を体験する過程をFreud(1917:139)は「悲哀の仕事」と呼んだが、現在では「グリーフワーク」がそれに代わる言葉として多用されている。

**死別による悲嘆** 遺族も死別により「悲嘆のプロセス」と呼ばれる情緒的反応を体験する。幾多の研究者から独自の悲嘆のプロセスが発表されているが、中でもAlfons Deeken(1996:37-47)は日本と海外の知見をもとに12段階からなる悲嘆のプロセスを提唱している。この「悲嘆のプロセス」を受けて、竹下(2008:158)は、日本人にとって一般的な仏式による葬儀はこのプロセスによく対応しているように見えると述べている。また佐々木(2005:232-233)は仏教の葬儀やその後の数々行われる法事が「悲嘆のプロセス」を助けるグリーフケアとなりうるのではないかと、そのために僧侶は形式的に儀式を行うのではなく、遺族への心理的・社会的なケアが必要であること、仏教が持つ新たなグリーフケアの提供の可能性を提言している。

またWorden(2008:38-54)は死別に適応するための「喪の課題」を4つ挙げている。課題Ⅰでは喪失の現実を受け入れるための手助けとして葬儀が挙げられている。課題Ⅱでは死別によるあらゆる痛みを味わうことが重要で、反対の動きとして故人の過度な美化、故人を思い出すのを避けることなどが挙げられている。課題Ⅲでは新たに課せられた役割をこなす等の外的適応、アイデンティティを再形成する内的適応、故人のいない世界の意味を再構成するといったスピリチュアルな適応という3つの適応領域が挙げられている。このなかで課題Ⅲをどのように達成するかが悲哀の仕事の成否を左右している。そして課題Ⅳである、故人との永続的な繋がりを見出すことが最も困難な課題とされている。

**グリーフケア** 一方死別を経験した人に対して行われる様々な支援を指す言葉として「グリーフケア」がある。グリーフケアについて明確な定義は定まっていないが、瀬藤・丸山(2004:397)は、これまでの研究の文脈を総合してグリーフケアを「重要な他者を喪失した人、あるいはこれから喪失する人に対し、喪失から回復するための喪(悲嘆)の過程を促進し、喪失により生じるさま

ざまな問題を軽減するために行われる援助」としている。また、坂口(2005:277)はグリーフケアを狭義と広義に分け、前者を「患者の死後、遺族への支援を意図した個人あるいは集団による態度や行動、活動のこと」とし、後者を「遺族への直接的、意図的な支援だけではなく、患者の死の前後を問わず、結果として遺族の適応過程にとって何らかの助けになる行いのこと」としている。

「悲嘆のプロセス」「喪の課題」といった遺族の内面的変容に対し、葬儀もしくは法事がなんらかの影響を与え、さらには遺族の助けとなっているのならばそれは葬儀や法事が持つグリーフケアとしての可能性を示唆するものとなる。次に社会学的な知見から葬儀の役割と歴史的な変容を概観する。

**葬儀の役割** Robert Hertz(1907:76)によれば葬儀は3つの処理を果たしている。土葬や火葬などによる遺体の処理、死者の魂を宗教的な儀礼により安定化させる靈魂の処理、死によって生じた社会的ネットワークの欠落を他者で補完し再生させる社会関係の処理(新谷2009:101-102)である。

**葬儀の変化** 新谷(2006:28-34)によれば、葬儀の伝承は次のように説明できる。近隣を中心とした住民によって行われるような旧来の伝統的な葬儀の伝承を $\alpha$ 波(伝統波)、霊柩車などを代表とする明治大正期にブルジョアから創出され定着してきた葬儀の伝承を $\beta$ 波(創生波)、葬儀社の提供するサービスによって行われるような高度経済成長以降広く一般に定着した葬儀の伝承を $\gamma$ 波(大衆波)というそれぞれ3つの波として考える。すると、 $\alpha$ 波は高度経済成長期以降伝承の波を衰退させ、代わりに明治大正期に創出された $\beta$ 波がブルジョアから大衆へ浸透し、 $\gamma$ 波として広く一般へ定着していく様子がみえてくる。1960年代と1990年代の葬送を比較した関沢(2002:223)は、葬祭業者の関与の増大と、公営の火葬場を利用することによる遺体処理の迅速化という2つの変化を指摘している。これは遺族が死者と密着する時間と空間の縮小、生死の中間領域の縮小化を意味しているという。

葬儀は、遺体の処理・靈魂の処理・社会的ネットワークを再生させる社会関係の処理という3つの役割を担いつつ、伝統的葬儀から葬儀社が関与する現代の形へと変化してきた。これに伴い、遺族に対し葬儀が及ぼす影響の変化も考えられるだろう。前述したように葬儀など死別にまつわる儀礼がグリーフケアとしての役割を有する可能性について示唆する研究は多い(佐々木,2005:232-233;竹下,2008:158;Worden,2008:42)。しかしながら現在葬儀は多様化し、その意味は見直されつつある。

実際に葬儀を行った遺族は、葬儀をどのように考えて

いるのだろうか。また、葬儀だけでなくそれに伴う法事にも目を向け、悲嘆のプロセスや喪の課題と照らし合わせながら考察することで、グリーフワークの途上でどのような役割を果たすのか探ることができるだろう。

そこで本研究では、葬儀や法事がグリーフケアとしての役割を持つのか、遺族へのインタビューより明らかにすることを目的とする。グリーフケアについて明確な定義は定まっていないが、本研究では瀬藤・丸山（2004：397）、坂口（2005：277）の定義を参考に、「遺族に対し喪失から回復するための喪（悲嘆）の過程を促進し、喪失により生じるさまざまな問題を軽減するために行われる援助」であり、「直接的、意図的な支援だけではなく、結果として遺族の適応過程にとって何らかの助けになる行いのこと」とする。

## 2. 方法

### 1) 調査対象

親や子、配偶者など近い身内を亡くした経験を持ち、葬儀や法事を行い、三回忌を終えている遺族で、死別後の期間は10年以内の者。

西九州大学健康福祉実践センターにて行われているチャレンジ幸齢セミナー参加者および、西九州大学健康福祉・生涯学習センターにて行っているエルダーカレッジ受講の高齢者に対してインタビュー協力を呼びかけ、同意を得られた者、もしくは筆者の交友関係より対象条件を満たした遺族で、協力の同意が得られた者を含めた男性3名女性11名の計14名。

### 2) 調査内容

7項目の質問からなる半構造化面接を行った。質問項目は表1の通りである。

表1 質問項目

① 亡くなったのは誰か、自分にとってどんな人が
② 訃報を知った時の状況、死を看取った時の状況
③ 葬儀までの流れ、その時の気持ち
④ 葬儀後のこと、その時の気持ち
⑤ 四十九日のこと、一周忌のこと、三回忌のこと（心情、様子、終わった後のこと）
⑥ 葬儀、法事を振り返って今どう思うか、なぜそう思うのか
⑦ 葬儀や法事以外で死別後の感情に変化をもたらす出来事はあったか、あればそれはどんな出来事で感情はどう変化したのか。

### 3) 調査手続き

インタビューの概要を説明し、協力が得られた調査対象者と個別に面接を行った。場所は西九州大学キャンパ

ス内の教室、または調査対象者自宅で行われた。対象者の許可をとり、ICレコーダーによる録音、または発言をメモに記録しながらインタビューを行った。

### 4) 倫理的配慮

インタビューの協力を得るにあたっては、紙面と口頭により研究の目的とインタビューの質問内容、取得したインタビューの内容はプライバシーに十分配慮したうえで本研究のみに使用することを説明し、協力の確認を行った。

### 5) 調査日時

平成25（2013）年6月18日～9月19日（時間は1人あたり、1時間～1時間半）

### 6) 結果分析

表2 対象者の概要

No.	年齢	性別	死別対象(年齢)	死別経過年数
1	83	女性	夫(73)	9
2	55	女性	夫(57)	7
3	56	女性	母(88)	7
4	60	女性	姑(86)	4
5	52	男性	父(79)	7
6	62	女性	母(84)	7
7	61	女性	父(86)	7
8	55	男性	父(83)	5
9	60	男性	母(95)	2
10	80	女性	夫(80)	4

上記の通り調査を実施した結果、14名のインタビューを収集することができた。さらに、語られた内容が本研究の目的に合致した表2に示す10名を分析対象とし、ICレコーダーの録音、またはインタビュー中に記録したメモをもとに逐語録を作成した。逐語録より、質問した内容に対し関連が深いと思われる発言を抜粋し、内容を短い言葉に直したうえで個々のカードに記録しKJ法によるカテゴリー化の作業を行った。カテゴリー化の作業は研究者の主観のみが反映されるのを防ぐため、社会福祉士の国家資格を有し対人援助職の経験を持つ者、修士課程において社会福祉を学ぶ院生、筆者の3名で行った。一連の作業は佐藤（2008）の質的分析法に基づき行われた。

## 3. 結果

### (1) カテゴリー化

インタビューの内容より作成した逐語録から、質問項目に関連の深い発言を抜き出した結果、合計で85の発言が収集された。これを短い言葉に直したのち、カードに

記入し KJ 法を用いて類似するカードをまとめ、カテゴリー化を試みた。結果、「葬儀」「法事」「葬儀と法事を振り返って」という3つの大カテゴリーに分類できた。さらに「葬儀」は7つ、「法事」は6つ、「葬儀と法事を振り返って」は7つの小カテゴリーがそれぞれ生成された。表中の右に元となった発言と発言した対象者を( )内に示した。

表3に示すように39のカードが大カテゴリー「葬儀」に分類された。その中からさらに7つの小カテゴリーに

分類することができた。以下に小カテゴリーについて解説する。

弔問客との交流：葬儀のなかでも、親族または遺族や故人の職場の同僚といった弔問客との関わりから生まれた会話や感情に関する発言。弔問客が訪れたことに対し、「嬉しかった」とするものが目立ち、遺族に対して労いの言葉かけが行われている様子などもうかがえる。

死の受容：葬儀を執り行っている最中や遺骨を前にし、死に対して静かに受け入れている様子が語られてい

表3 大カテゴリー1：葬儀

弔問客との交流	孫が遠くから来てくれたのが嬉しかった、涙が出た(1)	
	故人の職場の人が来てくれた、嬉しかった(1)	
	故人の職場の人が来てくれたのは嬉しかった(2)	
	故人の人間性が表れていた(2)	
	自分の職場の仲間も来てくれた、嬉しい(2)	
	みんなと顔を合わせる、故人が引き寄せてくれてると思う(3)	
	人がたくさん来て弔ってもらったから良かった(6)	
	父(故人)が慕われていたのかな、それなりに評価されてた、すごかったのかなと思った(7)	
	通夜で「これでよかったんだよね」という会話(6)	
	親族から(今まで母(故人)を)見てきたことを)労ってもらった(6)	
	(故人の)年齢も年齢でまあ良かったかな、という感じの声かけをしてくれた(8)	
	皆さんに葬式をしていただくことで責任感を感じる(10)	
	弔辞で故人に対して世話をしてきたことへの感謝の言葉をもらった、周囲からも労いの言葉をかけられた(9)	
	死の受容	静かにしていた、頭の中では「これでいいかな」(3)
遺骨を見てうわーっと思う、「こんななるんだ、人間って」(3)		
涙を流すことはなかった、来るべき時が来た(5)		
骨を拾うとき、「この骨で頑張ってくれたんだ、頑張ったね」(6)		
葬儀	死別の実感	火葬のときに泣いた、もういないんだ(2)
		お通夜るとき、じっとして見守る、「ああ、いないんだなあ」と思う(4)
		棺に花をあげるとき涙が出た、死に顔は悲しい(4)
		出棺のとき涙が止まらなかった、顔を見るのも最後(6)
		どうやって生きていったらいいのか、自分を支えてくれる人間がいなくなった、足元がなくなって不安(6)
		故人との思い出を思い出して涙が出た(9)
		お骨になってのを見て、「ああ、もうこれでお別れやな」本当にこの世にいない(8)
		やっぱり、「これでお別れかな」と思う(10)
気丈	葬儀が終わるまで気丈に振舞っていた(2)	
	バタバタで悲しんで暇はない(4)	
	現実を処理するため、気持ちは別として動いていた(7)	
	悲しみを通り越していた、押しやっていた(7)	
	これからどうしたらいいか、準備のことなどに気を使っていた(10)	
	悲しさはあるが表に出せない(10)	
余裕のない状態	眠れない、何とも言えない、ショック、悲しいどころじゃない(1)	
	何も分からない、全然余裕ない、がむしゃら(2)	
社会的宣言	この人が死にました、それを社会に宣言する場(5)	
	父親(故人)から名字を自分が受け継いだことの宣言(5)	
責任感の遂行	葬儀をやりきることが先決、父親に対する息子としての務め(5)	
	段取りをどうしていこうか、そういうのをずっと考えていた(8)	
	きちんとやるべきことをやる、しっかりあの世に旅立ってもらおうという気持ち(8)	
	ちゃんとすべきことはしとかんばいかん(2)	

る。

死別の実感：「これでお別れ」、「最後」といった死による別れを意識している発言が見受けられた。または、「涙が出た」といったように死別に対し感情が溢れだしている様子も含まれている。

気丈：「悲しさはあるが表に出せない」「気丈に振舞っていた」というように、死別の現実に対し、悲しみなどの感情はあるが、葬儀を執り行うため気丈な態度をとっていたことが表れている。

余裕のない状態：死別というショックと同時に葬儀という大仕事にあたらなければならず、「悲しいどころじゃない」「がむしゃら」といった発言から余裕のない心情が推察される。

社会的宣言：葬儀が死の事実であったり、家長を引き継ぐといったことを、社会的に宣言する場として位置づけられている。

責任感の遂行：「やるべきことをやる」「務め」など葬儀を遂行しようという責任感が発言に表れている。

表4 大カテゴリー2：法事

法事	親族との交流	法事の段取りを義母に聞きながら行った、そこから義母に対して開いていくようになった(2)
		義母から「ありがとう」、挨拶を褒めてもらった、ほっとした(2)
		唱和でみんなが一致団結みたい(6)
		皆さんが集まってお話を聞くのは良いんじゃないかと思う(10)
		親戚が集まり顔を合わせられる、仏様が引きあわせてくれる(10)
	故人との交流	お寺さんが入るから仏壇の前に座る(3)
		お経が終わってお説教があるときに故人を思い出す(4)
		近所の人にお菓子を配るとき故人の思い出話が出る、知ってた通りの故人(4)
	死別の再確認	終えてホッとする、「もういないんだ」と感じる、ポツンと穴が開く(4)
		お盆のときに亡くなったんだよね、会えないんだよねっていうのを覚悟する(6)
	心の整理	心の整理をするために必要(3)
		きちっと別れていく、自分が成長する、そういう区切り(3)
		お坊さんの言葉でふわふわしている感情が鎮まる、見送って良かったという気持ち(6)
	親族との葛藤をめぐる負担	義母から「ちゃんとした所でせんば」(2)
		法事のたびに親族で葛藤、法事後は「やれやれ終わった」(7)
	安堵感	一つの行事が終わった、無事に終わらせられたなという気持ち(8)
		子どもとして行事をクリアしている(9)

表4に示すように17のカードが大カテゴリー「法事」に分類された。その中からさらに6つの小カテゴリーに分類することができた。以下は小カテゴリーの解説である。

親族との交流：法事により、近しい親族、遺族が対面し、「話を聞く」「唱和」など体験を共有していることが語られた。また、「褒めてもらった」「義母に対して開いていくようになった」というように、親族間の交流が促進されていく可能性も示されている。

故人との交流：法事を行うことにより、「故人を思い出す」きっかけが生まれていることが「仏壇の前に座る」「故人の思い出話」を聞くといった故人との交流が行われていることがわかった。

死別の再確認：法事を行うことにより、「もういないんだ」「亡くなったんだよね、会えないんだよね」と、故人の死を再認識している様子がうかがえる。

心の整理：法事を行うことが「きちっと別れていく」「感情が鎮まる、見送って良かった」など、死別に対する自分の気持ちを整理、区切りをつける機会となっている。

親族との葛藤をめぐる負担：法事を行う上での遺族間

の葛藤やプレッシャーといった負担について語られている。

安堵感：法事を終えたことによる安堵の様子が表れている。

表5に示すように29のカードが大カテゴリー「葬儀と法事を振り返って」に分類された。その中からさらに7つの小カテゴリーに分類することができた。

生者との交流：「そういうときしか集まらない人と会える」「亡くなった故人が集まる場を作っている」というように、故人の死によって行われる葬儀や法事が、生きてる者同士が集まり交流する場となっている様子が分かる。

故人との交流：「故人の話を聞けたら嬉しい」「故人を思い出すうちは大事」とあるように、生前の故人について語り、思いをはせるという、葬儀や法事のなかで故人との間接的な交流が行われていることがうかがえる。

故人及び周囲への感謝：葬儀や法事について「亡くなった方に感謝の意を表」する場ととらえている語りが見られる。または、「葬儀や法事はみんなのおかげでできた」と、自分を支え、葬儀や法事に協力してくれた周囲に対する感謝の気持ちを抱く、といった感情が見受け

表5 大カテゴリー3：葬儀と法事を振り返って

葬儀と法事を振り返って	生者との交流	みんなで食べながら話をするのは良いと思う(4)
		遠い親せきなどそういうときしか集まらない人と会える(4)
		こういうことでもないが親戚が集まらない、死んだ人が集めさせてくれたと思うことができる(5)
		遺された者が仲良く生きていく、具体的な場が葬儀・法事(6)
		故人を偲ぶため親戚縁者が集まる(8)
		親族間、お互いの年齢や状況を話す、知る機会になる(8)
		お互いががんばろう、一人ひとりがちゃんとした暮らしをする、それを確認しあう場(8)
		血縁や一族が繋がっていることを感じる(8)
		亡くなった故人が集まる場を作っている(8)
	故人との交流	故人の話を聞けたら嬉しい(4)
		故人を思い出すうえで大事(4)
	故人及び周囲への感謝	葬儀や法事はみんなのおかげで出来た、感謝(1)
		故人のおかげで生活できる、葬儀して供養は大事(2)
		葬儀・法事は感謝の気持ちを持ってずっとしている(2)
		お世話になりましたありがとうございました、自分の中で区切り、自分の気持ちをおさめる(6)
		亡くなった方に感謝の意を表して「ありがとうございました」と頭を垂れることが一番良いと思う(9)
	自分は一人で生きているんじゃないんだ、先祖がいて自分がいる、感謝(6)	
	別れ・区切りとしての必要性	別れもしなきゃいけない、それが葬儀や法事(6)
		人が生きていくためになきゃいけないもの(6)
		区切りをつけるために必要(7)
		どんな形でも見送ってほしいし、見送らなきゃいけない(6)
		送られる側の人生の締めくくり、あの世へ行くお手伝いをしただけ(5)
	宗教的意味	手をあわせて参る、仏教とのご縁になる(10)
	自分目線	お金がかかる(3)
		生きてる者の宿命、仏壇がある以上どこの家庭でもしてるからしなくちゃいけないと思う(9)
		葬儀のことに對しても法事に對しても、代々伝えていくのが生きてる人の務め(9)
故人目線	葬儀・法事をしないと故人は惨めな気持ちになるのではないかと(2)	
	みんなに見送られるのは良いと思う(4)	
	亡くなった方への礼儀として必要、故人の尊厳を守る(7)	

られた。

別れ・区切りとしての必要性：葬儀や法事が、対象者にとってどのような意味または位置付けがなされているのか、言及されている。「別れもしなきゃいけない、それが葬儀や法事」「区切りをつけるために必要」等のように、葬儀や法事が死別を受け入れ、故人を送る儀礼として考えられている様子が明らかとなっている。

宗教的意味：葬儀や法事について「仏教とのご縁になる」と、宗教的に意味づけている。

自分目線：「お金がかかる」といった、葬儀や法事における遺族の金銭的な負担に注目した発言や、「しなくちゃいけないと思う」「生きてる人の努め」など義理や義務としてとらえている発言がまとめられた。

故人目線：「葬儀・法事をしないと故人は惨めな気持ちになるのではないかと」など故人の気持ちを推し量り葬儀や法事についてとらえている様子が分かる。

## (2) 事例

行ったインタビューより、葬儀や法事に伴う遺族の内面的変化について比較的具体的に語られたものを2事例とりあげる。

### 1) 事例1

対象者 Aさん55歳女性(死別後7年)

Aさんは結婚してわずかしか経たない夫を、1年という短い療養期間で亡くした。夫の死を信じられない気持ちでいたが、喪主を務めなければならず「全然余裕ない」状態だった。夫の前妻やその子どもたちもあり、身の置き場のない不安な気持ちでいたが、葬儀に職場の同僚が弔問に訪れ、「すごく嬉しかった」。それまで死の実感がなかったが、火葬後遺骨を見たときは泣いた。葬儀後の事後処理について義母との間にわたかまりがあったが、法事について教えてもらううちに「だんだん開いていくように」なった。法事は夫に対する感謝の気持ちをもってこれからも続けていきたいと考えている。

## 2) 事例2

対象者 Bさん62歳女性(死別後7年)

Bさんは長く患っていた母親を突然予期しない時に亡くしたが、「妙に落ち着いた」状態で、その場の判断を下していた。通夜の晩、母の遺体の傍で兄弟たちと、「これで良いよね、頑張ったよね」と、気持ちを確かめ合った。出棺の時には「顔を見るのも最後」だと思い、涙が出たが、遺骨を見て「この骨で頑張ったんだ、頑張ったね」という気持ちになった。

葬儀を終えると、母を亡くした喪失感を感じるようになるが、初七日と同時にいった四十九日で、住職の話や唱和により気持ちが鎮まってくのを感じた。葬儀や法事を、時間をかけて死を受け入れるために必要なものだと思っている。

## 4. 考 察

### (1) カテゴリー化

#### 1) 葬儀

特に死別後の心情と関係すると考えられる「甲問客との交流」と、「死の受容」「死別の実感」という死にまつわる2つの小カテゴリー、あわせて3つの小カテゴリーを考察する。

「甲問客との交流」の内容は、訪れた甲問客に対する感情や交わした会話に関するものである。甲問客の訪れが遺族の喜びとなっている様子がうかがえ、甲問客の気遣いを思わせる言葉かけが行われているのが見受けられた。

葬儀で、遺族が死と向き合っていると分かるのが「死の受容」「死別の実感」という2つの小カテゴリーである。死をありのまま受け入れている様子が「死の受容」、悲しみなど死別に伴う感情があふれ出ている様子が「死別の実感」に表れている。いずれも葬儀という状況が、遺族が死と、それに伴う感情と向き合い表出する場を作り出していると考えられる。

#### 2) 法事

法事では親族と故人という2つの交流が見られた。親族との交流は法事の準備段階から始まり、法事の最中の唱和や一時の会話により行われているのがわかる。そうした交流により関係が深まっていく可能性も見受けられる。故人との交流は、法事につきものの会話や仏壇と向かい合うことで生まれるもの、ふとした時に「故人を思い出す(4)」もの、いずれも間接的な故人との交流であり、他者と関わりながら、仏壇を前にして故人の供養を行う法事に由来してのものだと思われる。

死に関する心情も「心の整理」「死別の再確認」という2つが見られ、故人にまつわる法事が死別を遺族に再確認させる場となっている、もしくは死別を強く再認識

せずとも、死別から派生した自身の心情と向き合う機会として法事が存在するとも考えられる。

### 3) 葬儀と法事を振り返って

葬儀、法事と共通して生者と故人2つの交流が見られた。葬儀や法事で人々が集まることで、故人亡き後も生きている者達の交流が続くよう働きかける役割を担っていると考えられる。故人との交流では、葬儀や法事が故人のことを思い出すきっかけになっていることが分かる。以上と関連すると思われるのが、小カテゴリーの「故人及び周囲への感謝」である。

「故人及び周囲への感謝」には、葬儀や法事の中心となる故人、ときには故人を含む先祖に対するもの、葬儀や法事を行ううえで関わった人々に対するものの2つに分けられる。葬儀や法事が故人に対し感謝の心を持つきっかけとなったり、今まで持っていた感謝の気持ちを表す場となっている。また葬儀や法事を行うことで様々な生者との交流があり、そのなかで協力や助けを得ることもあるだろう。それが「葬儀や法事はみんなのおかげで出来た、感謝(1)」という気持ちに繋がっていると考えられる。この感謝は、葬儀や法事を振り返った大カテゴリーのみに見られるものであり、大きな特徴であると言える。

また交流とともに感謝に関連すると思われる小カテゴリーとして、「別れ・区切りとしての必要性」がある。葬儀や法事は死と向き合い、生者としての家族に別れを告げる機会と考えられる。葬儀や法事といった大カテゴリーの中で「死の受容」「死別の実感」と「死別の再確認」「心の整理」という小カテゴリーに挙げられている内容と共通する点である。そうした内面の過程を通過することで、葬儀や法事という場で悲嘆ではなく、感謝という感情が生まれることへと繋がっていくのではないと思われる。これら一連の流れは図1のように表すことができる。

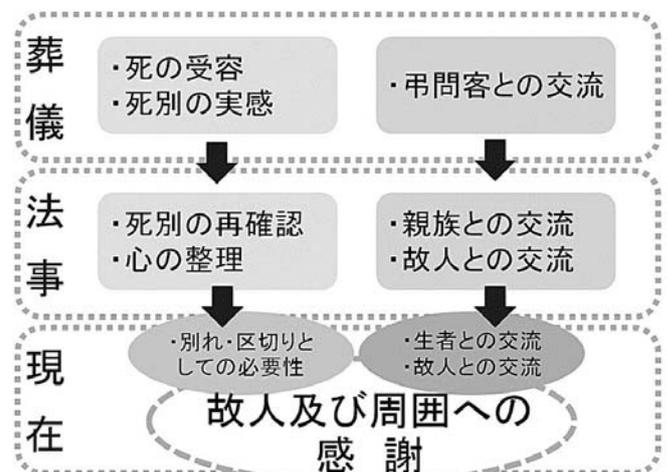


図1 葬儀と法事における死と交流の変遷

## (2) 事例

### 1) 事例1

Aさんは結婚間もない夫を、短い療養期間で亡くしている。良き夫を十分な別れの時間もなく喪うという体験は受け入れ難いものだったろうが、すぐに喪主として葬儀の準備に取り掛からなければならず、悲しみにくれるような余裕はなかった。夫も喪い、初めての喪主で様々な不安がある中、葬儀で自分が知る人達が訪れたことは心強く感じられたことだろう。夫を看取った後も夫の死を信じられず、考える余裕のない状態であったが、火葬後の遺骨が死という事実を明確に印象付け、Aさんが死と向き合う場面を作り出しているように見える。

その後義母とわだかまりが生じるも、法事の準備を協力して行っていく中で交流が生まれ、法事を通じた関わりが、義母との関係をより親密なものへと結びなおしていることがうかがえる。また、法事を執り行うことが亡き夫への感謝の表現となっており、法事がAさんの人生に新しい価値をもたらしたとも考えられる。

### 2) 事例2

Bさんは母を亡くしたその晩兄弟たちと、「頑張ったよね」という話をした。長い療養の末の予期せぬ最期となったが、互いが母と過ごした日々を振り返りながら、現在の状況を受け入れるため必要な時間だったのではないかと考えられる。出棺のときは「顔を見るのも最後」と思い涙が出たが、遺骨を拾うとき、死を受け入れるような感情への変化が見受けられる。

葬儀後死別による不安定な心情が自覚されはじめるが、初七日に四十九日も兼ねた法事が執り行われ、そこで住職の話を聞くうちにBさんも兄弟達も「フワフワしてる気持ち」が「鎮まる」、母を「見送ってよかったんだよね」と気持ちが落ち着いていくのを感じている。そして唱和で一体感が生まれた。以降の法事では死別の再確認がなされている。こうした葬儀や法事の時々における気持ちの変化が、葬儀や法事を「あれはやっぱり、はじめ、区切りだから。自分の気持ちをおさめるためにも」と捉えることに繋がっているのだろうと考えられる。

## (3) グリーフケアとの関連

葬儀と法事は、死にまつわるものと、交流という2つの捉え方ができる。

葬儀、法事は遺族に絶えず死を意識させる。葬儀では通夜や遺体、火葬などが特に「死の受容」「死別の実感」を生み、法事は「死別の再確認」「心の整理」として死を再考させる。この経験が葬儀や法事を「区切り・別れとしての必要性」と捉えることに繋がっていると考えられる。

またこれら儀礼は遺族を中心に様々な人が集い行われる。葬儀では「弔問客との交流」、法事ではごく近い

親族と故人へ交流は移る。生者と故人2つの交流が葬儀、法事で行われる。

葬儀や法事を通じ、遺族は「区切り・別れとしての必要性」と「生者との交流・故人との交流」を葬儀、法事から得ることになる。これら2つの要素が図1に示すように「故人及び周囲への感謝」の気持ちへと結びつけていると考えられる。

葬儀が、遺族が死を現実として受け入れる助けとなることは、Worden(2008:42)や坂口(2012:133-134)、大河内(2012:65)など多くの研究者に指摘されているとおりである。また、Worden(2008:42)は自身の「喪の課題：喪失の現実を受け入れること。」という課題達成に葬儀が役立つとしている。今回の研究でも葬儀さらには法事が、死と向き合う機会を作っていることが分かる。

大河内(2012:74-77)は初七日や四十九日などは、より近い者たちで、思い出や現在の気持ちを語り、互いの思いを確認し合う有意義な時間となる可能性を持つ儀礼であること、一周忌、三回忌などの年忌法要では、法要を営むことを区切りとし、遺族が新しい生活へのステップアップの機会とする場合もあることを指摘している。これは「区切り・別れとしての必要性」「生者との交流」と同様のものであると考えられる。

また、葬儀や法事を通し「弔問客との交流」「親族との交流」と「生者との交流」が続くことは遺族への社会的サポートへとなりうる可能性がある。山本(2011:579)はグリーフケアにおいて社会的サポートが欠かせないことを指摘しているが、Worden(2008:127)も悲嘆を促進する上で社会的サポートが大きな役割を果たすことが多いとしている。特に事例1でAさんを夫の実家族と結びつけたのは、故人の法事を通じてであった。

葬儀や法事は「死の受容」「死別の実感」「死別の再確認」「心の整理」といった遺族を死と向き合わせ、喪の過程を促進する助けとなっている可能性がある。また「弔問客との交流」「親族との交流」といった「生者との交流」は、遺族にとって社会的サポートになりうる可能性がある。そして「故人及び周囲への感謝」とは、遺族が死別後の世界へと適応していく一助となるのではないだろうか。これらは、葬儀や法事といった葬送儀礼が、グリーフケアとなりうる可能性を示唆するものと考えられる。

しかし今回のインタビュー対象者が執り行った葬儀や法事は、人々の繋がりが比較的保たれている地域で、親類縁者・近隣住民など多くの人々が集まって行われる従来のものであり、近年見られる直葬や家族葬といった小規模・少人数で行うものとは異なる。法事も家族のみ、初七日や四十九日を併せて行うなど簡略化される傾向にあり、したがって家族葬など小規模・少人数による葬

儀や法事を行った遺族に関する調査が必要と考えられる。

さらに本研究では対象者の性別や年齢、故人との続柄といった差異があり、それが葬儀や法事における遺族の死別後の感情へどのように関与しているのか十分な検討が必要である。

#### 付 記

今回のインタビュー調査にあたりご遺族の皆様には多くの示唆とご協力をいただきました。深く感謝申し上げます。

なお、本論文は西九州大学大学院（平成26年3月）に提出した修士論文を加筆・修正したものである。

### 引用・参考文献

- Alfons Deeken (1996)『死とどう向き合うか』日本放送出版協会。
- 大河内大博(2012)「日本社会の伝統的なグリーフケア」高木慶子編『グリーフケア入門 悲嘆のさなかにある人を支える』pp.61-90 勁草書房。
- 坂口幸弘(2005)「グリーフケアの考え方をめぐって」『緩和ケア』15(4)、276-279。
- 坂口幸弘(2012)『死別の悲しみに向き合う グリーフケアとは何か』講談社。
- 佐々木恵雲(2005)「グリーフケア 仏教の持つ可能性」『心身医』45(3)、232-233。
- 佐藤郁也(2008)『質的データ分析法 原理・方法・実践』新曜社。
- 瀬藤乃理子・丸山総一郎(2004)「子どもとの死別と遺された家族のグリーフケア」『心身医』44(6)、395-405。
- J. William Worden(2008)山本力監訳(2010)『悲嘆カウンセリング 臨床実践ハンドブック』誠信書房。
- 新谷尚紀(2006)「儀礼の近代」新谷尚紀・岩本通弥編『都市の暮らし民俗学③』pp.1-34 吉川弘文館。
- 新谷尚紀(2009)『お葬式 死と慰霊の日本史』吉川弘文館。
- 関沢まゆみ(2002)「葬送儀礼の変容 その意味するもの」国立歴史民俗博物館編『葬儀と墓の現在 民俗の変容』pp.201-226 吉川弘文館。
- 瀬藤乃理子・丸山総一郎(2004)「子どもとの死別と遺された家族のグリーフケア」『心身医』44(6)、395-405。
- 竹下隆(2008)『デス・エデュケーションのすすめ』pp.151-167 萌書房。
- Freud(1917)井村恒郎訳(1970)「悲哀とメランコリー」『フロイト著作集第6巻』pp.137-149 人文書院。

山本力(2011)「家族の死と心理臨床」『日本心理臨床学会心理臨床学辞典』pp.578-579 丸善出版。

Robert Hertz(1907)内藤莞爾訳(1980)「死の宗教社会学」『右手の優越』pp.31-128 垣内出版。

### 参考ホームページ

厚生労働省．平成25年(2013)人口動態統計(確定数)の概況．統計表第2表 1．人口動態総覧の年次推移．

[http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/kakutei\\_13/index.html](http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/kakutei_13/index.html) 参照2014年12月7日 PDFファイル

[http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/kakutei\\_13/dl/04\\_h\\_2-1.pdf](http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/kakutei_13/dl/04_h_2-1.pdf)